

# はじめに

本書は、「臨床で忙しいけど、少しは病理のことも知っておかないとなあ」と考えている開向きな皆さま、「学会発表の時、病理のことを突っ込まれて何も答えられなかった」と少し苦い経験のある皆さまのために、消化器病理の「見かたのコツ」を提供しようと企画されました。この「見かたのコツ」がポイントです。臨床医は、皆が病理標本を顕微鏡で見て自ら診断を付けられるほどに病理に習熟する必要は必ずしもありません。しかし、診療方針決定の根拠の一つである病理診断報告書を読んだり、実際に顕微鏡標本を挟んで病理医とディスカッションする時に、その説明がわかる程度には理解しておく必要があります。そこで、「見かたのコツ」を知っておけば、病理医とのコミュニケーションもスムーズになり、患者に応じて病理所見の説明も自分の言葉で行えるようになります。研究会、学会に自信を持って臨めるのは言うまでもありません。

では、これまでの病理の本と何か違いがあるのでしょうか。

あります。それは、まず、薄い。もちろん薄ければよいというものではありませんが、それなりの思慮の結果と思って下さい。次に、原則、消化管は内視鏡画像、肝臓は血液検査データ、胆膵などは臨床画像とセットで病理像を呈示しました。そして、左頁の病理写真は厳選して少し大きめに印刷し、その写真から何が読み取れるのかを、右頁の写真に囲みや矢印などを入れて明確にしています。この右頁が最も大きな特徴といえるでしょう。解説文は、臨床医からしばしば聞かれる「ギモン」を意識し、それに答えつつ、また $+a$ 知識として必要な事項を簡潔にまとめ、「キモの一言」まで1症例見開き2頁で完結としました。さらに各章の最初には0（ゼロ）として、「正常構造と病変の見かた」を概説し、75症例と「 $+a$ 知識」で臨床医が知っておくべき消化器病理のポイントはほぼカバーされています。

もう一つ、本書の大きな特徴が編集、執筆の陣容にもあります。臨床医のための病理を謳った書籍自体も少ないのですが、本当に病理医と臨床医がタッグを組んで仕上げた病理の本は皆無に等しいと思います。本書では、臨床医の代表として、ダブルバルーン内視鏡開発者としても国際的に有名な山本博徳先生と、生検組織の病理像も読める総合内科医の太田雅弘先生に編集に加わってもらい、また肝臓病理は佐々木素子先生に、臨床情報の提供は、三浦義正先生、牛尾 純先生にお願いし、まさに共同作業をしました。

さらに、羊土社編集部のスピード感と細部までの容赦のないツッコミは半端なく、実際、そのコメントや質問などに答えている内に一貫性のあるしっかりした本に仕上げてくださいました。編集部の鈴木美奈子氏、関家麻奈未氏、望月恭彰氏をはじめ羊土社の皆さまに深くお礼申し上げます。

本書を手にとっていただいた皆さまには、ぜひとも楽しみながら、少しでも消化器病理の「見かたのコツ」をつかんでいただけたらと思います。

2013年6月

編著者を代表して  
福嶋敬宜